
地獄戦記ディスガイア

黄泉傀儡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄戦記デイスガイア

【Nコード】

N6723U

【作者名】

黄泉傀儡

【あらすじ】

プリニー誘拐から始まった、『暴君ヴァルバトーゼ』の反逆。それにより魔界、さらには人間界もその成り立ちを正していった。

平和になった魔界だが次々と来訪者が訪れる。
そんな魔界での騒動とは？

初投稿の為、不定期です。さらに文章も安定していませんがお願いします。

〈第零話〉地獄からの救世主達の今

魔界——それは深き暗き闇の世界

その最下層——地獄と呼ばれる地である悪魔（+a）達が一大勢力を作り魔界の変革を求めた。

それは魔界政腐だけでなく強大な異星人、恐怖の大王プログラムなどと言った人知を超えた戦いだっただ。

そんな戦いも終わり魔界に平和が戻りその後もまあいろいろゴタゴタがあったのだが：

まあ魔界は地獄は平和である。地獄が平和、と言うのは言葉面的におかしい話だが。

「フム、あの一件で人間共も懲りたのか地獄に来るプリニーどもも僅かながら減少傾向にあるな。」

「左様ですね、閣下。」

そしてここで会話をしている二人。

先にプリニーの話をしたのは漆黒の髪に漆黒のマントに身を包んだ『暴君』の名で恐れられる吸血鬼で現在の地獄の事実上の支配者『ヴァルバトーゼ』

そして閣下と呼んだ雪国に暮らす狼のような白髪に浅黒い肌、そして赤いジャケットを身にまとった、

人狼でヴァルバトーゼの執事を勤める『フェンリツヒ』

プリニー養成機関の地獄の管理者であると同時に魔界最大派閥『新党・地獄』の党首とその補佐である。

「ネモがいなくなったことで今まで抑圧されてきた悪魔もかなり幅を利かせてるみたいだからな。」

「天使としては複雑な気持ちですがこれも人間の為なんですね・・・」

「

緑のフードをかぶった小柄少年、前大統領の息子である『エミーゼル』とピンクの髪の実天使『アルティナ』は続いて喋る。

「で、これからどうすんのよ？アタシの夢はここでストップ？」

「おねーさま、ここは空気を読む所だとデスコは思うデス。」

そしてぼやいてる少女はプリニーになりそこなった『風祭フーカ』とその義妹でラスボスを目指す最終兵器『デスコ』である。

そうは見えないこそがこの6人こそが世界を救った『新党・地獄』の中核メンバーなのであった。

この物語は彼らの住む魔界に來た來訪者達やそれを巡る物語である。

〈第零話〉地獄からの救世主達の今（後書き）

初投稿なので反応が心配です。感想、批判、誤字脱字、こうしたらいいなどは受けつけますが、
一方的に作品けなす人は無視します。

〈第一話〉三界の救世主達の今（前書き）

暴君ヴァルバトーゼ編&デスコ&フリーカ編とかファントムキングダムPSP（+パパは最強魔王編）とか日本一がんばりすぎでしょう・

〈第一話〉三界の救世主達の今

そんなかつて世界を救った一行の前に来客者達がいた。

一人はマフラーを巻いた小柄少年と露出度の高い衣装を着た赤髪の悪魔の少女、そしてどこか平和そうな空気を漂わせる金髪の少女。彼らもかつて世界を救った者達である。

その中の一人がものめずらしそうに地獄の風景を見て一言。

「しかしプリニーがこのような場所で作られてるとはオレ様も知らなかったぞ。」

「まあ殿下は即位するまで魔王の地位にしか興味なかったからですからねー」

「ムグ：」

ある事件が原因で現在『新党・地獄』の下で『ある悪魔』を探す。別魔界の『魔王ラハール』とその側近？『魔神エトナ』である。

ラハールの声に気づいたフェンリツヒがラハールガンを飛ばしながら話す。

「おい異界の魔王、あのアホ天使長お前の知り合いなんだろう？さつさと連れ帰らんか。」

「無茶を言うな！フロンの頑固さは折り紙つきだ！更にあの胡散臭い大天使の奴からも

この魔界と人間界が安定するまで監督するよう言われたみたいらしいしな。」

「大天使だと！？また大物が出たものだな。」

天子の暮らす天界とはこの広大な宇宙でもいまだ一つしか確認され

てない稀有な世界で

それを統治する大天使は展開の頂点に立つ存在である。

「全く・・・あの胡散臭い笑顔でどう騙したのやら。」

「あー酷いですよラハールさん！ラミントン様は人も悪魔も天使も騙すような人じゃありませんし、私もそんなに簡単に騙されません。」

『嘘だな（じゃない）』

「うー：ラハールさんだけじゃなくて皆さんもですか！？酷いです！」

そしてこの魔界にふさわしくない愛らしい少女は『天使長フロン』、
こう見えても天界の重鎮であり、

大天使であるラミントンは彼女を密かに経験をつませ次期大天使につかせようと考えてる。それほどの逸材なのだ。

「ところでラハールよ、貴様はいつまでこの魔界にいるのだ？」

「クッククク：ここにいればなんとなくいろんな強い悪魔が集まってくる気がするしな：『ヤツ』を探す拠点兼修行場にさせてやる！
光栄に思え！ハアーツハツハツハッハ！」

「オイコラ、閣下に対してどういう口の聞き方を・・・」

「よい、フェンリツヒ。『ヤツ』については全宇宙の脅威、俺とラハールの間には対等な『約束』：『協定』といってもいいか。それがあるしな。」

「ハッ・・・閣下そういうのであれば・・・チッ。」

尊大なラハールに対し不満を隠せずにいるフェンリツヒだが主君が
そういうのなら仕方ないようだ。

それを聞いてフロンは首をかしげる。

「ラハールさん？『約束』ってなんですか？」

「・・・お前もかつてオレ様達と一緒に追っていた『ヤツ』を倒すための『同盟』だ！」

「うむ、もしあの『ヤツ』が来たらイワシものんびり喰ってる暇がないからな。それどころかイワシが絶滅してまうやもしれん・・・」
「閣下、シリアスな話の途中でイワシの話題を出さないでください。年上の威厳が消し飛びます。」

『ヤツ』その名は『超魔王バール』、全宇宙でもっとも危険な存在でありラハールの父、『大魔王クリチエフスコイ』の死の原因を作った存在である。

クリチエフスコイは自らの命を犠牲にしバールを封印。しかしラハールは知らずとはいえバールの封印を解いてしまい現在、家臣団とともにその行方を追っている。

厄介なことにバールは魂だけの存在で尚且つその時代で最も強い肉体を持つ者に乗っ取る邪悪な魂の集合体の為なかなか足取りがつかめずにいるのだ。

「あ、そうでしたね。でもいいんですか？魔界空けちゃって？ヴェスヴィオさんやヤスールさん達がまた魔王の座を狙ってるんじゃないですか？」

「アホか。お前がヴィジャン共に魔王城の防衛を命令したんだろうが。それにオヤジにしか従わない旧家臣団（ゾンちゃん含む）が張り切ってるからよっぽど緊急事態がない限り大丈夫だ。」

「あ。」

「フロンちゃんてばちよつと薄情じゃない♪」

「うう・・・」

ヴェスヴィオとヤスール、彼らはラハールの叔父夫婦でかつて魔王

の座を狙いラハールと幾度なく対峙した悪魔である。

そしてヴィジャンとはなぜかフロンに従ってる金属生命体達でその戦闘能力は融合することでラハールとラミントンが全力を出しても引けをとらないほどである。

「しかしラハールよ、貴様の従姉妹とやらなかなか優秀だな。あのトラップはプリニー共の教育なかなか役に立つ・・・」

「・・・オレ様としてはシャスのトラップから解放されたからそれでいいのだが・・・エミールとやらやデスコとやらが巻き込まれていたがいいのか？」

「なに、魔界で生きるものとしてはいい経験になるであろう。しかしにんにくエキスが塗られた十字の聖銀の槍が飛んできた時はさすがのオレも平素ではいられなかったな・・・」

「・・・それを無邪気でやるのがヤツの恐ろしいところだ。」

ここにはいないラハールの従姉妹のシャス、戦闘力は差ほどではないが計算されたトラップは魔王としてすでに上級クラスのラハールを本気に命の危機に陥らせるほどである。

前述したラハールの叔父一家の長女だがラハールに対して懐いており口では悪魔として冷酷非情、残虐であろうとするラハールもなかなか手を出せない存在である。

「あ、ラハールさん、シャスちゃんもここにいますか？」

「『ラハールちゃんまた置いてけぼりにするの？』としつこいのだ！寛大なオレ様は連れてきてやったわけだ！・・・泣き出されたら煩いしな。」

ラハールの少しだけ漏れた本音にフロンは微笑む。悪魔の中の悪魔を自称するラハールも本当は優しく思いやりのある性格なのだ。本人は頑なに否定してるが。

「やっぱりラハールさん！愛ですね！」
「なぜそうなる！」

〈第一話〉三界の救世主達の今（後書き）

ちなみにこのSSは漫画版や小説版のいいところ取りです。ご都合主義のパラレルワールドです。

その辺はまた後ほど明らかにあります。

〈第二話〉偉大なる魔王の偉大なる父王（前書き）

結構考察入ってるんで話半分にしておいってください。
これを公式だと思うと大恥かきかねません。

〈第二話〉偉大なる魔王の偉大なる父王

ラハール一行が地獄で生活するようになってヴァルバトーゼやフェンリツヒ、エミーゼルなどの悪魔が驚いたことがある。

「まさかお前があのかリチェフスコイの息子だったとはな。通りで強力な魔力を持ってるわけだ。」

「フン、オヤジは関係ない。オレ様が天才だったただけだ。」

「え、ラハっちのお父さんってすごい人なの？」

フーカの疑問にエミーゼルが溜息をつきながら答える。

「またお前は変なあだ名を人につけて・・・いいかこいつの親父の魔王クリチェフスコイは魔王と呼ばれる存在の中でも一、二を争う実力者なんだぞ。」

最強の魔王と名高い『魔王神ゼノン』やいまだ現役でかつて宇宙最強と呼ばれた『暗黒竜バビロン』に引けを取らない実力者って言われてるし、

まだ力があつた頃の父上や『暴君』と畏れられていた頃のヴァルバトーゼを上回るといわれるほど力を持っていたんだぞ！」

「たしかにバールを『倒す』ことができて『封印』することができるのは俺やハゴスにもできんな。」

現在宇宙最強といわれてるゼタにもバールほどの存在を緻密な魔力のコントロールで封印できるとは思えん。」

フーカの疑問にエミーゼルとヴァルバトーゼが答える。

ラハールの父、クリチェフスコイは単純な実力でバールを『倒す』のではなく『封印』することを選択した。

これはバールが実体を持たない悪しき魂の集合体であることを知っ

ていたのであると同時にならどうすればいいかを考え封印という道を選んだクリチェフスコイの冷静かつ理性的な判断によるものが大きい。もしバールを倒してしまつたらより強力な存在に転生する危険性がある上、バールの魂が確認できなくなる恐れがあるからだ。

しかし『封印』となると単純に『倒す』よりも困難だ。

名作携帯獣ゲームの捕獲方から解るように強い存在はまず体力を削ってから道具なり魔法なりを使って封印するのだが、バールはあまりにも強大でそれを弱らせるのも難しい上、封印も絶大な魔力を使つての上での針の穴に糸を通すかのごとく緻密な魔力コントロールが必要とされる。クリチェフコイはその両方を持っていた。まさに強大な力と知恵の持ち主といえよう。

「まあ俺はそういう細々とした事は苦手だ。噂に聞く伝説の秘宝『全知全能の書』『ライトオブビューティ』『シャドウオブビューティ』の力や

『背徳者サロメ』や『伝説の魔女マージョリー』ほどの精神力やコントロールさを持ち合わせた術者の力ならば可能かもしれんが・・・」

「まあクリチェフスコイ様は変わり者でしたからねー。温厚とか紳士的とか悪魔に似合わないものを持っていたし。」

そう嘯くエトナだがその目は過去を懐かしみながらクリチェフスコイに思いを馳せてる。

過去に貴族悪魔にたびたび苛められていた下層階級出身のエトナに何かと目をつけたのがクリチェフスコイだったのだ。

それだけにエトナはクリチェフスコイに忠誠を誓ってるし口では物騒なことを言いつつ遺児であるラハールを決して見放したりはして

ない。

いって見ればラハールとエトナは似たもの同士なのだ。だからよく喧嘩もする。でもその関係は姉弟に似てると、旧クリチエフスコイ家臣団は語る。

「うーん・・・なんか偉大なる大魔王って言われてる人にしてはラスボスっぽくないデスね。」

「アホか、小娘。魔王が全て好戦的というわけでもなければ破壊的なわけじゃないわ!」

「それに大物魔王ほど人間界に興味がないからねー」

「どうせ愚かな人間が勝手に争って自滅するような星なんていらん。と言うのがオレ様の意見だが力ある魔王ほどその傾向が強いぞ。」

まあ暇つぶしで人間界を支配してみるのも魔王っぽいし余興になるなどはラハールの談。

「しかしオレ様も『暴君』ヴァルバトーゼの名前くらいは知ってるぞ。たった数十年の間に名を上げ絶対的な力を持つ闇の支配者として君臨した…とな。」

まさか魔力を失ってプリニー教育係になっていたとは思ひもしなかったが。

しかしそこからまた上級魔王クラスまで上り詰めるとはさすがのオレ様も驚嘆だな。」

「同じ吸血鬼でもマデラスなんかとは大違いですよねー。」

「当然だ、我が主はそこらのちょこざい吸血鬼とは意思も信念も素質も何もかも上なのだ。」

「うむ、そしてイワシの力だな!」

「閣下、そこは暴君らしく決めていただきたかったです・・・」

己の主のイワシ好きにはさすが閉口せざるを得ないフェンリツヒだった。

ちなみにマデラスとはエトナに強烈なトラウマを与えられこき使われている吸血鬼族の悪魔である。

決して弱い訳ではない。下級の魔王程度の実力はある。が、エトナに与えられたトラウマがあまりにも強烈過ぎた為か

ラハールの配下になったばかりの上、直接戦闘することが苦手な少年ネクロマンサーのアラムスに劣る。

「しかしクリチェフスコイか・・・会って見たかったものだ。」

「あーなんかそのうち会えると思うよ。」

「・・・オレ様としては複雑な気分だな。」

「そういえばフロン様、大天使様とよく会うあの方って確か・・・」

「アルティナちゃん、一応あの人のことは天界でも機密事項なんですよー」

くその頃为天界く

「ヘツキシ！・・・誰か私のことを噂してるのでしょうか？」

〈第二話〉偉大なる魔王の偉大なる父王（後書き）

『ライト of ビューティ』『シャドウ of ビューティー』はマール王国シリーズに登場する伝説の秘宝です。

なぜゲスト登場のマージョリー様の特殊装備じゃないんですか！日本一ソフトウェアさん！

〈過去編〉幼き魔王と魔王神の過去（前書き）

遅れてすいませんでした。体調を崩し気味でモチベーションがなかなかあがらず・・・

そして今回の話は少し残酷描写があります。そして捏造100%です。

〈過去編〉幼き魔王と魔王神の過去

これはまだ偉大な賢王とたたえられた悪魔がまだ魔王になる数百万年前の話。

荒涼とした大地。そこには無数の亡骸と原形を留めず血が大地に染みこんでいる。そしてその大地に一人の若い女性が立っていた。そこはつい先ほどまで戦場だった。

いや戦場というには語弊がある1000を超える魔王がたった一人の魔王に返り討ちにあった、など戦争でもなんでもない。ただの虐殺：ですらない、子どもが蟻の巣に水を流し込む。その程度の話だ。

その風景を一人の少年が見ていた。

背が低く黒に近い濃紺の髪は二本の触覚の様な物が伸び手いるのが特徴的。そして首には赤いマフラーを巻いていた。

彼の名は『クリチェフスコイ』。後の世にこの惨劇の光景を作り出した『魔王神ゼノン』にならぶ伝説の魔王として名を馳せる悪魔だった。

「千の魔王と言ったって流石にピンキリだったんでしょうがやっぱり一人で1000の魔王を返り討ちできるの尋常じゃないですね。

魔王神の名は伊達じゃないということですか・・・で、あの僕、敵意はないんでその剣を首筋から離して欲しいなあなんて・・・」

クリチェフスコイの背後にはゼノンが立っており首に剣を当てている。

まだ千年ほどこしか生きていないクリチェフスコイだが魔王並の力をすでに持っており裏切られつづけたゼノンに警戒心をもたれるのは無理もなかった。

「・・・お前は何だ？お前はこの場に來た有象無象のなかでも屈指の実力者であろう？私の命が、我が称号が欲しくないのか？」

「別に魔王神という称号に興味はないですよ。僕はいつか魔王になって自分の暮らす魔界を一人でも多く幸せにしたいと思っています。まあ我侭ですけど、それで力のない子どもやおじいちゃん、おばあちゃんとか助かったり貴族とか平民とかの差別がなくなったりすればとてもいいんじゃないですか。

だから全魔界最強とか、うーん、興味ないわけじゃないですけどあんまり魅力的じゃないんですよ。」

「その歳でその力を持ち偽善と知りつつ理想を求めるか。私はどこで道を間違えたのだらう。」

私は悪魔としての本能に、力に酔いしれたのか。本当に大切なものよりを履き違えてたのか。」

人一倍警戒心の強いゼノンはこの目の前にいる聡明な少年が本気で言ってるのに気づき剣をはなす。

そして一方のクリチェフスコイはあまりにも心が乾ききってる彼女に偽善を貫こうとした。

「・・・あの、恋人とか部下は無理ですけど友達になら僕なれますよ！」

「・・・もう遅い。私は誰かもう信じることなどできない。だから私は『やり直す』。」

「！？待って下さい！それは！」

「さらばだ・・・そして最後にこんなによい子に会えて我は・・・私はうれしかった。また・・・あえるといいな。」

一度だけ彼女は素に戻って——彼女はその一言を最後に——
——ゼノンは首に剣を突き立てて絶命した。同時に彼女の魔力は『ナニカ』を包み込み何処かへと消えていった。

その顔はようやく探したものが見つけたかのような達成感、安堵感、そして『何か』に対する期待があった。

「『転生』・・・ですか。」

『転生』とは読んで字の通りである。しかしこの場合の転生は自ら望んで次こそは、と言う意思がある。

何処か平和な世界で人間に生まれ変わるつもりだろう。

「・・・いつかまたどこかで、平和な世界で会えるといいですね。」

優しい少年と悲しい魔王の願いは後に実現することになる。

「私はビューティー男しゃ・・・」

「ええい鬱陶しいのじゃ！この中ボスが！」

「ノォーン！私を中ボス呼ばわりしないでください！せめて隠しボスとか！」

それはとても優しく楽しい愉快な再会。

〈過去編〉幼き魔王と魔王神の過去（後書き）

クリチエフスコイが好きなんで捏造しちゃいました。

ちなみにクリチエフスコイ少年期はラハールそっくりですが目つきが悪くありません。

性格のモデルはf a t eの子ギルですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6723u/>

地獄戦記ディスガイア

2011年7月16日03時15分発行